ARTIST Talk

TOGI HIDEKI

東儀秀樹

雅楽師

ポジティブでいなければと思ったことは一度もありません

生まれてから現在に至るまで、海外にいた幼少期を除いた多くの時間を世田谷で過ごしている東儀秀樹さん。奈良時代から1300年間雅楽を世襲してきた楽家（がくけ）に生まれ、宮内庁楽部で篳篥（ひちりき）*を主に担当。ソロデビュー以降はジャンルを超えた幅広い音楽を、ソロ活動のほか様々なコラボレーションで表現しています。近年では息子さんとの共演・共作も行っている東儀さんは、音楽を含めあらゆることを楽しむ達人。ご自宅の一室にて興味深いお話を伺うことができました。

※3月中旬に取材。新型コロナウイルスの影響で掲載が遅れた旨、ご了承ください。

30
48
77

奥沢駅前音楽祭*は どんな美味しい仕事があっても優先

――ずっと世田谷にお住まいなんですね。

世田谷が好きでこの街から出たくないんです（笑）。今僕が住んでいるエリアはどこにでもアクセスしやすい便利な場所なのに、緑が多く静かで過ごしやすいんですよ。雨がしとしと降ると軽井沢にいるような気分になる、気持ちの良い場所。だけど祭りの時期になると、気風（きっぷ）の良い地元住民が集まって威勢の良い雰囲気が漂うんです。奥澤神社の大蛇お練り*なんてすごいですよ。僕も必ず毎年参加していて、汗だくで神輿（みこし）を担いだこともあります。

――奥沢の祭りといえば、奥沢駅前音楽祭に毎年出演して近年は息子さんとも共演されていますよね。

初回からずっと出ているので皆勤賞ですね。何よりも楽しみにしているイベントで、その日程は毎年スケジュールを押さえているんです。どんな美味しい仕事があっても全部蹴って優先していますよ（笑）。息子が初めてステージに上がったのは彼が幼稚園のとき。僕が演奏していたら突然自らステージに上がってきて、僕の周りで踊り始めたんです。

小学校の高学年からは一緒に楽器を演奏し出して、それが定番化。そのうち観客の方々もおもしろがってくれるようになり、息子の成長を見守りながら観てくださっているわけです。すごくアットホームなお祭りですよね。

一分一秒でも早く家に帰りたい

あちこち飛び回っているので、忙しくてほとんど家にいない状態を想像されるんですが、自宅のスタジオで制作するので、ほとんど朝から晩まで家族と一緒。地方公演の終演後は一分一秒でも早く帰りたいと、すぐに新幹線の駅へ向かって走ります。何より家と家族が好きなんです。息子を怒ったことは未だにないし、僕と家内に至っては付き合ってから今まで口論すらしたことがありません。

――それはすごいですね！

「怒る」というのは結局こちら側の感情。たとえそれをぶつけて気が済んだとしても、解決にはなりません。何か問題が起こった時にはその行為を否定するのではなく、なぜそうなったのか、どうしてそうしようと思ったのかを聞くことが大切。その上でその行為によって他人がどう感じるかを本人が理解しやすい形で伝えられればいいんです。あくまで本人が理解することが肝心なのであって、威圧的に制御することでは何も生まれないと思います。

出過ぎた杭は打たれなくなる

――由緒ある雅楽師の家柄に生まれた東儀さんですが、子ども時代はどんな環境だったんですか？

千年以上雅楽を世襲してきた家ではあるけれど、現代では世襲制という決まりはありません。僕の場合は雅楽を耳にして育ったわけでもなければ、雅楽師になれと言われたことも、自らなろうと思ったこともありませんでした。ただ僕は幼稚園の頃から音感があったようで、初めて手にしたハーモニカで第九*をいきなり吹き出して親を驚かせたそうです。小学校の頃には自分でも人より音楽ができるという自覚はありましたが、音楽家になろうとは思えず、他の分野に興味を持っていました。プロゴルファーや漫画家になりたかった時期もあったな（笑）。

――雅楽の道に進むまでにはかなり時間がかかったんですね。

ロックが好きでバンドを組んだりはしていましたが、雅楽に興味を持ったのはかなり遅かったですね。演奏訓練を受け始めたのは高校を卒業した後。その歳で始めるのは遅すぎると、最初は宮内庁楽部の方に断られたんですが、試験に合格したので無事に入ることができました。自分で言うのもなんですが、音楽に関してはとにかく器用だったので意外とすんなりできてしまって。それから7年間の訓練を経て宮内庁楽部で10年ほど演奏をしました。

――宮内庁を去り、ソロとして活動を始めたきっかけは？

古典が嫌で辞めたわけではなく、今でも古典は最高なものだと思っています。深いところまで知った上で想像してロマンを持って雅楽に接したかったので、音楽に留まらず平安時代の生活様式にまつわる書物を読んだり、講義を受けたりしていました。そのうち、色々な角度から雅楽の良さを広げたいと思うようになったんですが、宮内庁職員

は国家公務員。副業はもちろん禁止だし、個人的に研究したことや制作した音楽作品を発表する機会があまり持てません。それで、僕なりのやり方で雅楽を背負っていくしかないと思い至り、退職しました。

――東儀さんの奏でる篳篥はとても自由で、聴く楽曲によって様々な顔を持っていますよね。

篳篥って水みたいな楽器。隙間があればスーッと身を変じて、どこにでも流れて溶け込むことができるんです。僕の演奏を聴いて「あんなの雅楽じゃない」と言う古典至上主義の方もいますが、僕は古典雅楽、ポップスやクラシックなど様々な音楽を体験した上で、楽器ひとつひとつのあるべき姿を理解できていると自負しています。楽器の個性を生かすことこそが演奏の基本で、そこには古典も現代音楽も差異がないはずです。この考え方に自信を持っているからこそ、周りからの批判は気になりません。「出る杭は打たれる」と言うけれど、「出過ぎた杭は打たれなくなる」とも言われますよね。

悔いなく楽しく充実した今を生きたい

――目標や今後やってみたいことはありますか？

それがないんですよ。僕、ちゃんと定めた上で何かを決めたことがなくて。定めないからどこにでも行けるし、目の前に現れたものに飛びつけるんだと思っています。定めちゃうと違う方向から本当に良いものが来ても飛びつけない可能性があるでしょう。行き当たりばったりの閃(ひらめ)きが僕の命。これはいけると思ったらとことん行って、違うと思ったらパッと切り替えて何でもやっています。僕の中にはまだ自分の知らない自分がいると思っていて、そんなワクワクがあるからこそ、何も決めずに直感を信じて生きていきたいんです。

――若くしてガンと闘った経験があると伺いました。そのポジティブな姿勢にはその体験が生かされているんでしょうか？

デビュー前の25歳の頃にガンが見つかり、余命1年と宣告されました。でも、自分でも不思議なんですが、今こうやって強く前向きでいられるのは、あの経験があったからではないんですよ。あの時すでに、自分でも驚くくらい何の動揺もなくて、悲嘆に暮れることなど一切なかったし、医者に絶対治してくれとも訴えなかった。「ただ、喚(わめ)いて八つ当たりしても寿命は伸びない。どうせなら悔いなく最後まで楽しかったと思って死にたい」と思ったんです。だからこそ、その時の瞬間瞬間を大事に感じられました。

――気持ちを切り替えたのではなく、自然にそんな風に思えたんですか？

ポジティブでいなければと思ったことは一度もないんです。持って生まれた性格としか言いようがないんだけど、僕にとってポジティブとかプラス思考は、はなから必要のない言葉でした。マイナスな人ほど前向きになろうって自分に言い聞かせるわけでしょう。僕はものすごく楽天的なので、「人間死ぬときは死ぬし、それは運が決めること。だったらジタバタするより悔いなく楽しく充実した今を生きたい」と思ってしまう。でも別に達観しているわけではなくて、まだまだ自分に満足してないし自我や欲望だらけですよ。“雅楽師・東儀秀樹”というと、クールでどちらかと言うと暗そうなイメージを持たれることが多いんですが、実際は真逆。会った方はギャップに驚かれます。

＊篳篥:主に雅楽で使用される竹製の縦笛。オーボエなどのルーツと言われている。
＊奥沢駅前音楽祭：東急目黒線「奥沢」駅前の特設ステージで行われる地元商店街主催のアマチュア参加音楽祭。
＊奥澤神社の大蛇お練り：世田谷区奥沢の祭り。2016年、東京都の無形民俗文化財に指定。
＊第九：ベートーヴェンの交響曲第９番。

PROFILE

東儀秀樹
Togi Hideki

1959年東京に生まれる。高校卒業後、宮内庁楽部に入る。1996年デビューアルバム「東儀秀樹」で脚光を浴び、以後次々とアルバムをリリース。他ジャンルの音楽家とのコラボレーションなど、雅楽器を生かした独自の表現に情熱を傾ける。

Six Unlimited Concert Tour 2020
～オールスターズの企て～
2020年12月より 全国公演を開催
それぞれの道で頂点を極め、型破りな音楽センスで時代を牽引し続ける６人の男たち。呼び名の通りハンパなく無限大な奇跡のバンドが始動する。
出演：東儀秀樹（雅楽）、古澤 巖（ヴァイオリン）、塩谷 哲（ピアノ）
小沼ようすけ（ギター）、大儀見 元（パーカッション）、井上陽介（ベース）
公式HP http://www.sixunlimited.jp/

取材・文：濱安紹子／撮影：末武和人